



講師の弘前大学古村さん

令和元年11月19日、ひとにやさしい社会推進セミナーをヒロロで開催し39名が参加しました。弘前大学人文社会科学部講師古村健太郎さんを講師に招き、心理学から考える恋と愛をテーマにお話いただきました。講師の古村さんからは、相互に依存する恋人同士の関係性が、将来的なDV被害につながる可能性が示され、そうならないために恋人関係を崩さずに相手に自己主張することの必要性についてお話いただきました。恋人同士が良い関係を築くためには、他者との関係性についての教育が必要で、一斉に教育することができる高校までに行うことが重要であるというお話がありました。

さんかくひとりごと

～レディーファーストに賛否!!日本人はなぜ苦手?～

「レディーファースト」という言葉がテレビから・・・ニューヨーク在住の日本人女性が、地下鉄で席を譲ってくれようとした若者に会ったとき、日本での経験を思い出したらしい。「東京にいた2週間、毎日電車に乗ったが一度もそういう人に会わなかった。男女問わず必死な目で我先に走って席を取り、即座に目をつむる人の多いこと」とつぶやいたところ、「女性だから席を譲られるのは当然だと思うのは変」「男性は疲れていても女性に席を譲れというのがあなたの男女平等?」など反発があったとのこと。日本にきた外国人に「レディーファーストはどのようにして身につけたか」と聞いたら、みな口をそろえて「親や親戚に幼少期から厳しくしつけられた」と答えたそう。女性だけではなく、子供や高齢者など自分より立場が弱い人や力のない人に親切にするのは当たり前という考え方。日本人は他人に対して無関心なのではないかというコメンテーター。文化としては定着していないものの、重い荷物を持ったり、席を譲ったり、ドアを開けてあげることができる男性ってカッコイイねとまとめていた。

(森)

以前、東京で電車に乗っている時に学生風の男性に席を譲られたことがあり、その時のことが思い出された。疲れてもいたし感謝の気持ちでいっぱいだった。困っている人に自然に手を差し出すことが当たり前になると日本も変わるのだろう。他人に無関心ではいけない。まずは家族で考えよう「レディーファースト」を・・・



編集後記 第69号の編集を終えて

退職したら、ご褒美は豪華客船での外国旅行だと夢をもっていた。現在話題になっている新型コロナウイルス感染症で、また一つ夢が霞んだ。でも人生は長いのだと知って夢は先延ばしにしようと思う。梅

生まれて初めて「誕生日休暇」をもらった。毎年迎えてきた日なのに今年には自分の人生と向き合う特別な日になった。これからもきちんと生きていこうと思いを新たに・・・森

今年は暖冬少雪と言われ過ぎてきましたが、急に雪が降ると慌てふためいている私です。北国の冬だったことを忘れてしまいそうな時に大雪が降るのは、北国にとって雪は恵みの授かり物であることを再認識させてくれるのかもしれない。のん

■ 編集発行 弘前市企画部企画課ひとづくり推進室
〒036-8551 弘前市大字上白銀町1番地1
電話：0172-26-6349（直通） FAX：0172-35-7956
E-MAIL：kikaku@city.hirosaki.lg.jp



参画だより

No.69
令和2年3月発行
弘前市企画部企画課

すべての人が安心して暮らせる社会の実現に向けて

弘前市では、平成30年11月に策定した「弘前市男女共同参画プラン2018～2022」に基づき、高齢者、障がい者、性的マイノリティ、外国人等が安心して暮らせる環境整備を進めています。今回は、性的マイノリティに関する取組についてご紹介します。

市の印鑑登録証明書の様式から性別欄を削除

市では、性的マイノリティの方が日頃感じるストレスや不安感を軽減できるように、市が様式を定めている証明書等について、法的に義務付けられているものや合理的理由があるものを除き性別の記載を不要とする取組を行っており、このたび市の印鑑登録証明書から性別欄を削除しました。これは、県内では初めての取組となります。これまでも希望する方には国民健康保険証の性別表記を裏面記載とするなど取り組んできましたが、今後も様々な様式の見直しを進めます。

市職員研修

男女共同参画についてーLGBT等の市民のために自治体職員にできることー

令和元年11月20日、弘前市役所において市職員54名を対象に性的マイノリティの方への理解を深めるための研修を行いました。「性的マイノリティの方のために自治体職員ができること」をテーマに、弘前大学男女共同参画推進室助教山下梓さんを講師に招き初めて開催しました。研修の中では、性的マイノリティの方は見た目ではわからないため、身近にいないと思われがちだが、家族、親戚、同僚、隣人として地域の中でともに暮らしていること、また、日常生活では様々なものが性別で分けられているため、制服、トイレ、宿泊、災害時の対応等、生きづらさを感じる場面が多いとお話がありました。市ではこのような研修を通じて性的マイノリティの方を含め、子どもからお年寄りまですべての人が安心して暮らせる社会の実現に向けて取り組んでいます。



研修を受ける市職員

ひとにやさしい社会推進セミナー「基礎から学ぶLGBT～性の多様性と人権～」

令和2年1月30日、一般の方を対象として性的マイノリティの方への知識を基礎から学ぶことができるセミナーをヒロロで開催し、幅広い世代から49名が参加しました。講演では、講師の弘前大学男女共同参画推進室助教山下梓さんから、人の性は男女だけではなく多様であるが、世界的に法律や制度等は十分に対応できていないこと、また日本では法律上（戸籍）の性別を変更することは可能だが、厳しい要件があり、中でも性別適合手術など身体的にも精神的にも大きな負担・苦痛を伴う場合もあることなどについてお話しいただきました。講演後は、参加者同士で意見交換を行い、性的マイノリティの方への理解を深めました。



講師の弘前大学山下さん(左)

弘前大学男女共同参画推進室10周年×弘前市男女共同参画推進20周年記念シンポジウム「男女共同参画推進、そしてその先」

令和元年12月19日、男女共同参画推進記念シンポジウムを弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにおいて開催し164名が参加しました。これは、弘前大学が男女共同参画推進室設立10周年、弘前市が男女共同参画推進20周年を迎えたこと、また、櫻田市長が平成30年11月に、弘前大学佐藤学長が昨年8月に「輝く女性の活躍を加速する男性リーダーの会」行動宣言に賛同したことを記念して開催したものです。内閣府地域働き方改革支援チーム委員の渥美由喜さんによる特別講演では、ダイバーシティ（多様性）をテーマにプライベートも含めた一人ひとりの状況に配慮し職場に共感の連鎖を起こすことが必要だというお話がありました。その後、櫻田市長と佐藤学長による特別対談では、弘前市と弘前大学の男女共同参画の歩みや今後の目指すべき方向についてお話があり、櫻田市長からは「市民には個性が輝く生き方をしてほしい」、佐藤学長からは「様々な人が参画することで教職員が働きがいを持ち、学生には学びがいのある大学にしたい」とのお話がありました。



講師の渥美由喜さんによる特別講演



櫻田市長(右)、弘前大学佐藤学長(左)による特別対談

5～15:40
宏 × 弘前大学 佐藤 敬
男女共同参画推進室 講師 渥美



弘前市女性活躍推進企業のご紹介

弘前市では、女性の活躍を推進するため女性の雇用環境の改善に向けた自主的な取組を実施している企業等を「女性活躍推進企業」として認定しています。女性の雇用環境を改善させることは、企業全体の成長、企業イメージの向上につながると言われています。

弘前市女性活躍推進企業への申請をお待ちしております。

○令和元年9月から令和2年2月末までに新規認定された弘前市女性活躍推進企業



第48号認定
株式会社長谷川建設



第49号認定
株式会社善世会

hirosaki smart project 女性活躍推進異業種交流会

今年度、第3・4回目となる女性活躍推進異業種交流会を、ヒロロで実施しました。第3回は「防災対策～災害への備え～」について、青森県防災危機管理課よりお話いただきました。

第4回はカゴメ株式会社から講師をお招きし、弘前大学と共同で取り組んでいる研究内容をご紹介いただいたのち、野菜の摂取と健康との関係についてご講話いただきました。当日は、特殊なセンサーを使い野菜の摂取量を測定する体験も行われ、食生活と数値の関係について参加者同士交流を深めながら、楽しく学びました。

今年度は4回の開催で、延べ154名の方にご参加いただきました。



野菜の摂取量を測る参加者(第4回)

きらめく人、ときめく心

☆今回のきらめく人 中原 一さん

第2回目は、「陶芸先生」として知られている中原一さんをご紹介します。幼いころから幾多の苦勞を乗り越え、努力を重ねてきた人生から学ぶ点は多く、人生の厚みや深みを感じました。

○生い立ちから学生時代

中原さんは昭和9年に秋田で生まれ、すぐ里子に出されました。6歳の時に東京へ、9歳の時に秋田へ戻ってきました。母の仕事の都合もあり親戚宅を転々としていたため、小学校は7回転校したそうです。その後、母一人子一人で暮らすようになり、生活は苦しく、家事、畑仕事、家畜の世話をしながら高校を卒業、恩師の勧めもあり弘前大学教育学部を目指し見事合格したものの、休学して働かざるをえない状況でした。その後、奨学金で復学することができ、アルバイトを掛け持ちしながら勉学に励み、昭和33年に卒業することができました。

○周囲を照らす人～陶芸先生～

卒業後、田舎館村の小学校の教員として採用となった後、教育事務所、教育委員会などを経て55歳で赴任した小学校で、使われていない陶器を焼く窯に出会います。このまま窯が使われなくなることを惜しんだ中原さんは、夏休みに弘前市の工業試験場に通り、陶芸を学びました。そして、PTAの保護者を集め陶芸を教え始めたそうです。

校長として教職を終えた後も、公民館や幼稚園、小学校の陶芸クラブなどで指導を続けており、地域の「陶芸先生」として親しまれています。また、毎朝、地域の小学校近くの交差点で、子どもたちの安全を見守る「見守り隊」としても、ご活躍されています。

戦前、戦中、戦後、「陶芸先生」の85年の人生の物語はまだまだ続きます。もう一仕事がんばれるよと私の心を動かし、ときめかせてくれた人でした。(梅)



陶芸を教える中原さん(中央)

わたしと本

私が人と話しをするときに一番気をつけていることは、相手が話しているときは、聴く側はその主役を取らないということです。そして相手が何を伝えようとしているのか、求めているのかをしっかりと聴くようにしています。

あるとき、聴くことに長けている人から薦められたのが、「こころの声を「聴く力）」という本でした。著者の山根基世さんは、NHKのアナウンス室長として勤務されていたので、インタビューのプロとして「聴く」ということの奥深さをわかりやすく紹介していました。山根さんは、知りたかったことを次から次へと教えてくれました。

人が発する言葉を「聴く」という体験がなければ、人間そのものを知ることができません。「聴く」という行為は、相手の心に寄り添うこと、人と人とをしっかりと繋ぐもの、そして自分自身の思いを深め育ててくれるものなのです。それこそが真の教養であり、人生を豊かにする秘訣なのだということを学びました。

これからも「こころの声を「聴く力）」を養い、人と心の通う繋がりを大切にしたいと思います。

(のん)

